

**(2) NPOのコーディネートにより地域の担い手が  
相互交流・相互扶助するサステナブルコミュニティの形成**

特定非営利活動法人 ちば地域再生リサーチ



# 1 活動の背景とこれまでの経緯

## (1) ちば地域再生リサーチの概要

NPO法人ちば地域再生リサーチ(以下CR3)は、2003年8月に、千葉大学の建築系の教員5名によって設立された。対象とするニュータウンを活性化し、高齢者が安心して暮らせる終の住処とすると同時に、新たな居住者を地域に呼び込むような魅力ある再生と地域づくりを行うことを目標として、生活サポート事業、コミュニティ事業、再生戦略事業、パートナーシップ事業、コンサルティング事業に取り組んでいる。

スタッフは、2009年時点で、有給の専従スタッフ2名、非常勤スタッフ5名、ボランティアスタッフ4名で、いずれも地域の住民である。無報酬の理事として活動する大学教員と有給の地域の住民スタッフとが融合した組織形態で、毎日活動が展開されている。活動の拠点は、2つの近隣ショッピングセンター内に3つの空き店舗を借りている。1つは活動全体の運営とコントロールをするメインの事務所であり、他の2つは、それぞれの近隣ショッピングセンターに、住民とともに地域活動を実践する拠点として開設している。

海浜ニュータウン 高洲・高浜地区



公団賃貸	7,369戸
県営住宅	516戸
市営住宅	1,422戸
社宅等	288戸
公団分譲	4,240戸
民間分譲	1,849戸
戸建て	842戸



CR3の活動範囲と拠点

## (2)対象地区の概要

### 対象地区の概要

1970年代から開発が進んできた千葉海浜ニュータウン内の高洲・高浜の両団地は東京を中心とした高度経済成長下の経済活動を支えるベッドタウンとして形成されてきた。この地区（高洲1～4丁目、高浜1～7丁目）は、約2km四方の中に公団分譲、公団賃貸、県営住宅、市営住宅、民間分譲、民間賃貸、戸建てなどのあらゆる住宅形式と大型商業、公共施設が集積している。

現在この地区には、約18,000世帯、約44,000人の人口が住み、高齢化率は約16.0%であるが、団塊世代が多くを占めているため、今後高齢化率が急激に高騰することが予測されている。








空家が全国的に住宅ストックの1割を超え、世帯数に対し過剰な住宅ストックを抱えている中で、都心回帰現象や最寄り駅直近に新規マンションが供給され、団地内の人口減少や高齢化が進み始め、築年が古いものから見捨てられていくと予想されている。そうした衰退性を潜在的に持っている団地では、居住者を団地内に留め、さらに新たな居住者を地域に呼び込むような魅力をもつ再生計画が求められる。

### 対象地区の課題

郊外のニュータウンが抱える大きな課題の一つが、住民の高齢化である。団地のほとんどの住棟は中層のウォークアップ型（階段室型）で、上り降りは高齢者にとっては大変である。日頃の安否確認や生活サポートが必要な一人暮らしの高齢者もいる。

室内インテリアの老朽化も進んでいる。長期間リフォームがされず、建設初期の入居から模様替えをせずに、汚くなったまま住み続けている人たちが少なからずいる。住民が自身の責任でリフォームや補修を行わなければならないが、放置されたままである。

このような課題は一例であるが、全国のニュータウンや大規模な団地では、高齢化、老朽化によって居住地としての魅力がなくなりつつある。

<p>居住者のライフエリア に対応していない</p>  <p>駅前の大規模商業と公共施設の集積</p>  <p>旧態とした近隣型ショッピングセンター</p>	<p>リフォームが 促進されない</p>  <p>入居当時(30年前)からの壁紙</p>  <p>カビだらけの浴室</p>
<p>孤独死の増加</p>  <p>高齢者を見守る仕組みがない</p>	<p>階段の上り下りが大変で 日常生活に支障</p>   <p>エレベータがない5階建て住棟</p>

### 団地の課題

(3) ニュータウン・団地再生型エリアマネジメント

当団体では、エリアマネジメントのために下記26項目をニュータウン・団地再生型エリアマネジメントと掲げ、活動計画に盛り込んでいる。

歩いて暮らせる街づくり	持続可能な再編を可能にするスモールサイジング コンパクトで効率性の高い複合的な土地利用 暮らし関連サービスの分散型拠点づくり 地域資源の有効活用 だれにでもやさしい交通
美しい街づくり	画一的でない景観づくり 緑の保全と活用 共有空間の管理運営 事前的な規制と長期的な誘導 環境に配慮した街づくり
未来に続く住まいづくり	多様な住宅の供給とミックス 広域エリアの相互調整・マネジメント 住まいの安定と地域需要への対応 地域内での住み替え 住まいの安全性・快適性向上
安心のある暮らしづくり	地域福祉の推進と支援 地域の中での子育て支援 安心・安全の街・住まいづくり 健全な暮らしを支える環境づくり
未来に続く暮らしづくり	コミュニティ活動の推進と支援 生涯学習の推進と地域文化づくり 外国人居住と地域融和支援
地域価値を高める仕組みづくり	地域ブランディングとプロモーション 再生まちづくりのための情報拠点 地域経済の活性化 民間投資・ノウハウの誘導

CR3が考えるニュータウン・団地再生型エリアマネジメントの項目

また、以上のエリアマネジメントを進めるために、次のような機能を持つ。

(構想策定機能)	多様な主体のパートナーシップでエリア全体の構想と将来ビジョンをつくる機能
(調整機能)	多様な主体のパートナーシップの受け皿となり、主体間の調整を行う機能
(支援機能)	ニュータウン再生に向けた体制整備、実施および推進を支援する機能
(事業・サービス機能)	ニュータウン再生に向けて直接的な事業やサービスの展開をする機能

ニュータウン・団地再生型エリアマネジメントに必要な機能

#### (4) ちば地域再生リサーチの現在の活動

当団体は、住民が元気に暮らし続けられる新しい街づくりを目標として、ニュータウン・団地再生型エリアマネジメントの一環として、「住まいのサポート」「暮らしのサポート」「コミュニティ形成」「再生戦略づくり」「地域との連携」を5つの柱として活動を推進している。



#### 暮らしと住まいのサポート

CR3のサービスは、暮らしのサポートと、住まいのサポートの2つである。これらは「団地レディーズ隊」という、買物支援サービスと軽易なリフォーム・修理の両方の作業に携われる子育て期の終わった主婦たちによって提供されている。一人が領域の異なる複数の作業を行うこのハイブリッドのしくみは、ビジネスとしての事業性と、地域の社会課題への貢献とを継続的に両立できるようにしたもので、地域の主婦によるコミュニティビジネスのモデルとなっている。

#### 暮らしのサポート

暮らしのサポートは、高齢化の進展、孤独死の増加、近隣センターの衰退という地域課題に対して、それぞれの対策としての買物支援、安否確認、共同宅配という手段を一つにまとめ、高齢者の生活を支援するシステムに再構成したものである。

このシステムには、住民が買物支援サービスを受けるだけで、CR3が結果として安否確認を達成するというしくみが内蔵されている。

現在のサービスは、近隣センターで買物した商品を1回50円（商店街が50円/袋を負担）でCR3のスタッフである住民が利用者宅まで配達するものである。このサービスは、住民自らが商品を見ながら買物をしたいというニーズに合っており、また、できるだけ外に出て歩くという高齢者の介護予防にも役立っている。定期的な利用者は約60名である。

## 住まいのサポート

暮らしのサポートには、DIYサポートとリフォーム・住宅修理がある。

DIYサポートでは、地元のホームセンターと協働しDIY講習会を開催している。これは、住民が自宅をDIYリフォームできるようにするだけでなく、CR3のスタッフ養成を兼ねている。また、住民のDIYを自宅に出張してアドバイスしたり、対象の住宅に合った壁紙・ふすま紙などの材料選択のアドバイスを行ったり、それらの販売も行っている。

リフォーム・住宅修理では、地域の住民スタッフが作業を行い、低プライスなリフォームと住宅修理の方法を提供している。地元の住民が作業するという安心感から、継続的に注文がある。



レディース隊による買物支援



DIYリフォームサービスの様子

## コミュニティ形成

CR3は、2つの近隣型ショッピングセンターに住民が様々な活動をする拠点をつくり、そこで地域活動に取り組むための住民（個人・団体）のコーディネートと活動のサポートをおこなっている。これまでに、住民による趣味の教室・展示会、福祉団体のフリーマーケット、自治会対抗イベントなど約30の個人と団体が活動を行っている。そこでは、近隣型ショッピングセンターの活性化の主役を地域住民が担うことによって集客につなげ、「商店街の活性化＝地域全体の活性化」につなげていこうとしている。



小学校でのまちづくりワークショップ



ボランティアによる中国人向け日本語講座

## 2 本調査の背景と概要

### (1) 本調査の背景

本調査に至った背景は、ちば地域再生リサーチ（以下CR3）が考えるエリアマネジメントの推進と、これまでCR3が地域活動の実践の中で培ったネットワークの資源を地域の活性化に生かしたいという思いがあったためである。

CR3が考えるエリアマネジメントにおける「コミュニティ活動の推進と支援」

本調査は、CR3が考えるエリアマネジメント項目のうち「コミュニティ活動の推進と支援」の立ち上げとその実施に向けた取り組みに力をいれるものである。また、エリアマネジメント項目の「地域ブランディングとプロモーション」、「画一的でない景観づくり」、「地域の中での子育て支援」、「地域経済の活性化」と関連させながら、「アート系」「子育て系」「コラボレーション系」の3テーマに着目している。

歩いて暮らせる街づくり	持続可能な再編を可能にするスモールサイジング	関連
	コンパクトで効率性の高い複合的な土地利用	
	暮らし関連サービスの分散型拠点づくり	
	地域資源の有効活用	
	だれにでもやさしい交通.....	
美しい街づくり	画一的でない景観づくり	関連
	緑の保全と活用.....	
	共有空間の管理運営	
	事前的な規制と長期的な誘導	
	環境に配慮した街づくり	
未来に続く住まいづくり	多様な住宅の供給とミックス	関連
	広域エリアの相互調整・マネジメント	
	住まいの安定と地域需要への対応	
	地域内での住み替え	
	住まいの安全性・快適性向上	
安心のある暮らしづくり	地域福祉の推進と支援.....	関連
	地域の中での子育て支援	
	安心・安全の街・住まいづくり.....	
	健全な暮らしを支える環境づくり	
未来に続く暮らしづくり	<b>コミュニティ活動の推進と支援</b>	中心項目
	生涯学習の推進と地域文化づくり	関連
	外国人居住と地域融和支援.....	
地域価値を高める仕組みづくり	地域ブランディングとプロモーション	関連
	再生まちづくりのための情報拠点.....	
	地域経済の活性化	
	民間投資・ソウハブの誘導	

CR3が実施しているエリアマネジメントの全体と本調査の中の推進項目の位置づけ



### 中心項目としての「コミュニティ活動の推進と支援」の推進

これからのニュータウン、特に住民の暮らしとコミュニティの活性化には、住民の内発的な資源や力が重要である。そこで、当団体では住民がコミュニティ活動に参加できるよう、身近なコミュニティ拠点の設置や運営方法を検討し、さまざまな連携・ネットワークによって活動の誘導と運営を支援することをエリアマネジメントの目標としている。

エリアマネジメントにおけるコミュニティ活動の推進と支援としては、下記の3つの活動を行う計画としている。

- ・市民参加型のイベント・活動のコーディネート
- ・コミュニティの活性化を推進
- ・これらの活動をプロモーションし、広く活動の担い手を集め、地域活動を推進する役割を担う

### 関連項目の推進

上記の中心項目である「コミュニティ活動の推進と支援」と平行して、以下の4つの項目と関連させながら、エリアマネジメントを推進する。

#### 地域ブランディングとプロモーション:地域ビジョンの策定、連携、プロモーション

CR3は、エリアマネジメント組織と各主体との連携のもとで、時代に即したテーマづくりや新しい地域価値づけの方法等の検討を行い、これらの価値を、ニュースレターや情報誌の発行、ポータルサイトによるPRによってプロモーションする。

#### 画一的でない景観づくり:コミュニティアート(ソフトの取り組み)

アートによる街づくりを住民と一体となり進める。CR3は、コミュニティアートが円滑に実施されるように専門化支援を行い、場づくりや、ファシリテートの機能を担う。これらの活動をプロモーションし、広く共感者、参加者を集める役割を担う。

#### 地域の中での子育て支援:地域子育て支援拠点

地域で活動するさまざまな団体とネットワークを形成し、子育て世代同士や地域の中で子育て支援を進める。

CR3は、各主体との連携のもとで、子育て関連サービスを提供するほか、これらの活動をプロモーションし、広く活動の担い手を集め、地域子育て活動を推進する役割を担う。

#### 地域経済の活性化:商店街活性化活動・マネジメント

CR3は各主体との連携のもとで、商店街活性化活動とそのマネジメント、コミュニティビジネス等の地域活動の支援を行う。また、地域商業の活動をニュースレターや情報誌の発行等によってプロモーションする。

これまでの活動の中で「地域の中の担い手」の発掘

当団体では下記の商店街の空き店舗をコミュニティルームとして開放し、市民主体の活動を通じた商店街活性化を実践してきた。活動期間、利用団体を下記に示す。

アチキチ（稲浜SC、2007年7月～）での住民による活動	26 団体が利用
クラカラ（高洲SC、2008年5月～）での住民による活動	12 団体が利用

一般市民に公募する形でイベントを行ってきたため、地域密着の商店街活性化というテーマに関心を抱き、自ら活動する「地域の中の担い手」を実際の地域活動を通して発見してきた経緯がある。

この地域の中では、個人や集団レベルで小さな地域活動（福祉活動や清掃活動、サークル等）が行われているが、相互の関係づくりはなく、小さな動きがばらばらにあるという現状である。個人や集団レベルでの活動を、相互交流や相互扶助の機会を高め、サステナブルコミュニティの形成を促進するようなサポート及びコーディネートが重要である。

#### アチキチ（稲浜SC）での活動



クリスマスイベント



陶芸教室

折紙教室

#### クラカラ（高洲SC）での活動



クリスマスケーキ作り



アートフラワーの展示即売会

### (3) 本調査の概要

#### 調査の骨格

調査は、大きく以下の4つの骨格からなる。

#### 1) ニュータウン内の地域活動の担い手の抽出

本調査の方法として、まず千葉市・公民館等の情報より入手した活動主体のリスト及びこれまでのNPO活動を通してネットワーク形成をしてきた活動主体のリストを作成し、ニュータウン内の担い手の抽出を行い、リスト化を図った。

#### 2) 地域活動の担い手へのヒアリングと課題の抽出

抽出した担い手に対し、コーディネートを見据えてヒアリングを行い、担い手の抱える活動課題及び地域課題を抽出した。

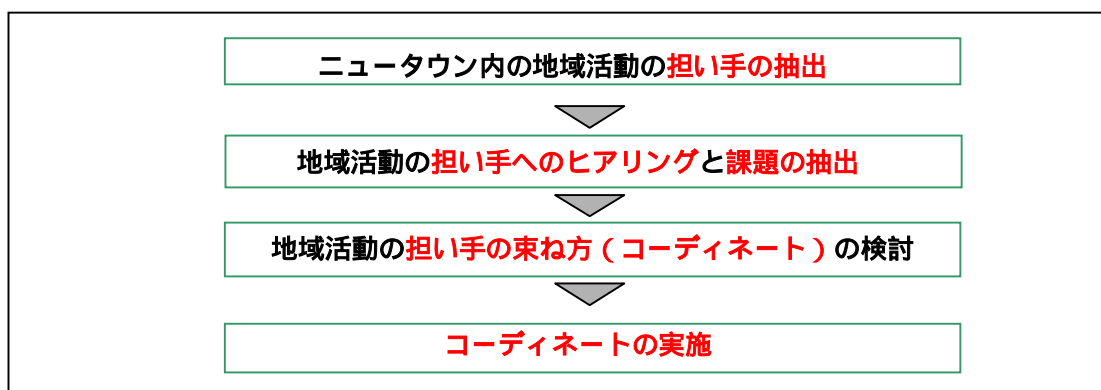
#### 3) 地域活動の束ね方(コーディネート)の検討

ヒアリング対象となった担い手を束ねるための理論的な整理を行い、地域活動の束ね方(コーディネート)の方法を検討した。

#### 4) コーディネートの実施

検討を行ったテーマごとにコーディネートの方法を検討し、コーディネート(ワークショップ)を実施した。また実施結果に対して課題や今後の展開を整理した。

#### 調査のフロー



本調査のフロー

### 3 サステイナブルコミュニティの形成方法の検討

#### (1) ニュータウン内の地域活動の担い手の抽出

対象とする千葉海浜ニュータウンの中で地域活動を実施している「地域活動の担い手」を抽出しリスト化を行った。対象となる地域活動の担い手は、「個人としての担い手」及び「NPO 団体、公益活動を実施している任意団体（住民組織・サークル）」の2種類である。

また、抽出作業は下記の4つの材料から行った。

- 千葉県・千葉市のNPO 団体一覧、公益活動団体一覧などの資料
- 地域の公民館・コミュニティセンターでの聞き取り調査
- これまでのNPO 活動からの抽出
- 地域調査の過程（調査を通して連携の取れた相手からの紹介（口コミ））

以上の作業から、合計で378の個人を含む地域活動の担い手を抽出することができた。

#### (2) 地域活動の担い手を発掘するためのヒアリング

##### ヒアリングの方法

上記の作業で抽出、作成した地域の担い手のリストからヒアリング対象者を抽出し、ヒアリングを行った。

ヒアリング方法は、個別ヒアリングとし、ヒアリング調査票に記入する形で行った。ヒアリング調査票は、大きく次の3点を把握するものである。調査票は、プレヒアリングによってフィードバックを行いつつ完成させた。

- 地域の担い手が地域活動を進める上で直面する課題
- 担い手を束ねるコーディネーターに必要な基本情報
- 地域での活動の方向性

本調査では、アート系、子育て系を中心に、18の地域の担い手（個人と団体の両方）に対してヒアリング調査を実施した。

##### ヒアリングの効果

地域の担い手を発掘するために、上記のヒアリングを行った。その効果を考察する。

##### ヒアリングは担い手の発掘には有効な手段

ヒアリングを通して担い手の活動の課題や方向性、趣向を把握できた。集団の中での発言のみでは抽出できない個人の意見を引き出すことが、担い手の発掘につながった。また、ヒアリングを行うことでコーディネーターと担い手の関係構築につながることも伺えた。

ヒアリング対象者(=担い手の発掘)はカギとなる担い手から広がる

ヒアリングを通して知り合った担い手からの紹介により、個別の活動だけではネットワークを組みにくい担い手との接点が生まれた。このことから、カギとなる担い手の発掘がまずは重要であるということが明らかになった。

### (3)地域活動の担い手から得られた地域活動に対するニーズ

担い手としての活動においては、他の担い手との連携や、より大きな宣伝・広報・ネットワーク形成などの部分で協力を求める声が多くあった。組織での活動では行政への要望などが多く、そのために連携する動きが既に地域内で確認できた。また、組織内の担い手不足の問題においては個人の協力者をいかに見つけるかが課題となっている。

以下にアート系・子育て系のヒアリング結果から、それぞれの地域活動に対する具体的なニーズを整理した。

#### アート系の担い手からの地域活動に対するニーズ

個人として自立しながら活動する専門家、もしくは団体で交流を楽しみながら活動する趣味の団体へのヒアリングからは、明確なニーズや課題が把握できた。主な課題として挙げられた項目は以下の2点である。

##### 1)作業などの場所の確保のニーズ

- ・活動場所の不足や規模の不足から、場所に対するニーズがある。

##### 2)PR活動、ネットワークづくりへの支援のニーズ

- ・教室や活動のPR、宣伝、ネットワークづくりへのニーズがある。

#### 子育て系の担い手からの地域活動に対するニーズ

子育てに関する担い手不足である地域の担い手には、地域の子育てに関する課題を実感し、熱意を持って活動している人が多い。地域の子どもをよく観察し、子どもに関する情報や知識、活動のアイデアを持っている。主な課題として挙げられた項目は以下の2点である。

##### 1)地域内で協働する人材へのニーズ

- ・地域で連携した取り組みの意義を感じている親が減ってきている中で、地域内で協力者との連携を求めるニーズがある。

##### 2)地域の中での子育て環境づくりへのニーズ

- ・地域での子どもの居場所が減っている中での、「今の子ども」に適した環境づくりへのニーズがある

#### (4) 地域活動の担い手の束ね方の検討

NPOのコーディネートにより地域の担い手が相互交流・相互扶助するサステナブルコミュニティの形成に向けて、地域活動の担い手の束ね方の検討を行った。

本調査では、下記の2点がサステナブルコミュニティの形成に必要な重要課題になると考えられる。

【重要課題】  
実行力のある活動主体となるための工夫  
活動を継続させるための工夫

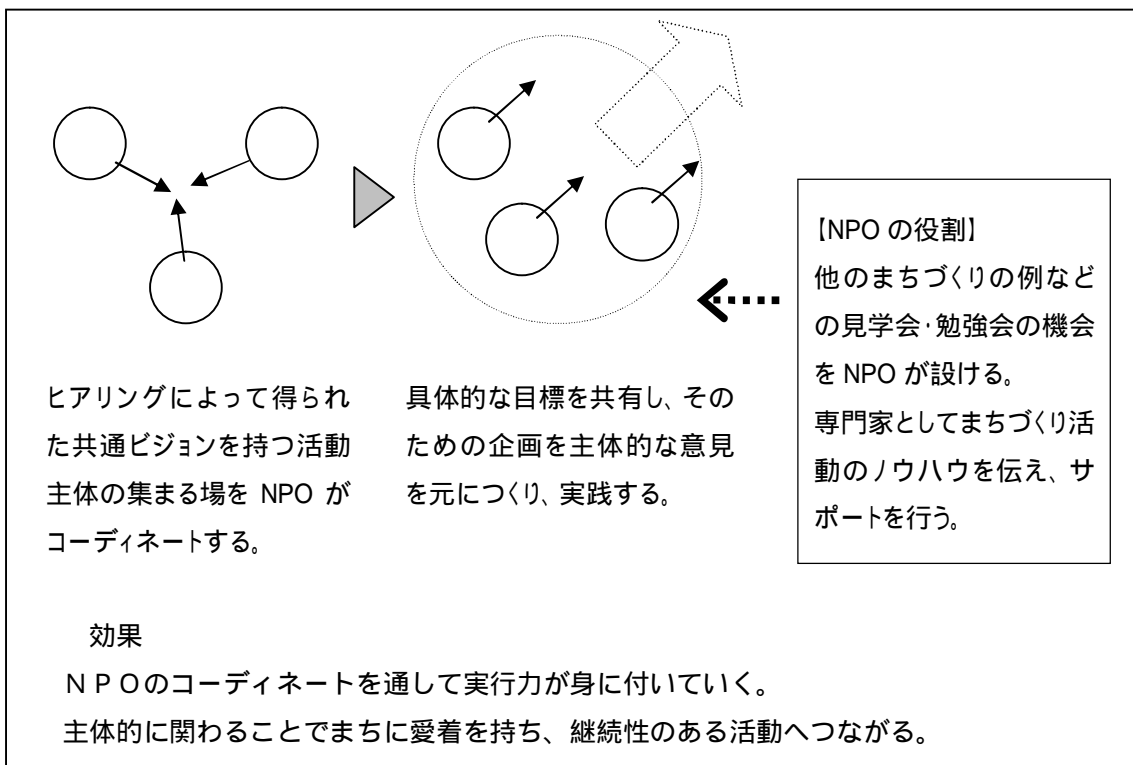
ニュータウン（住民の暮らしとコミュニティ）を活性化するためには、住民の内発的な改善に向かう力が必要であり、そのために、個人や集団レベルでの活動が連携、協働する機会を高め、サステナブルコミュニティの形成を促進するようなサポート（コーディネート）が重要となる。そこで本調査では、どのような地域の担い手のコーディネートがありうるか、そしてその際のNPOが担う役割がどんなものかを、理論モデルを構築して検討する。

#### 小さな担い手同士のコーディネート

小さな担い手同士のコーディネートには「協働」「交流」「連携」の3つのタイプがある。

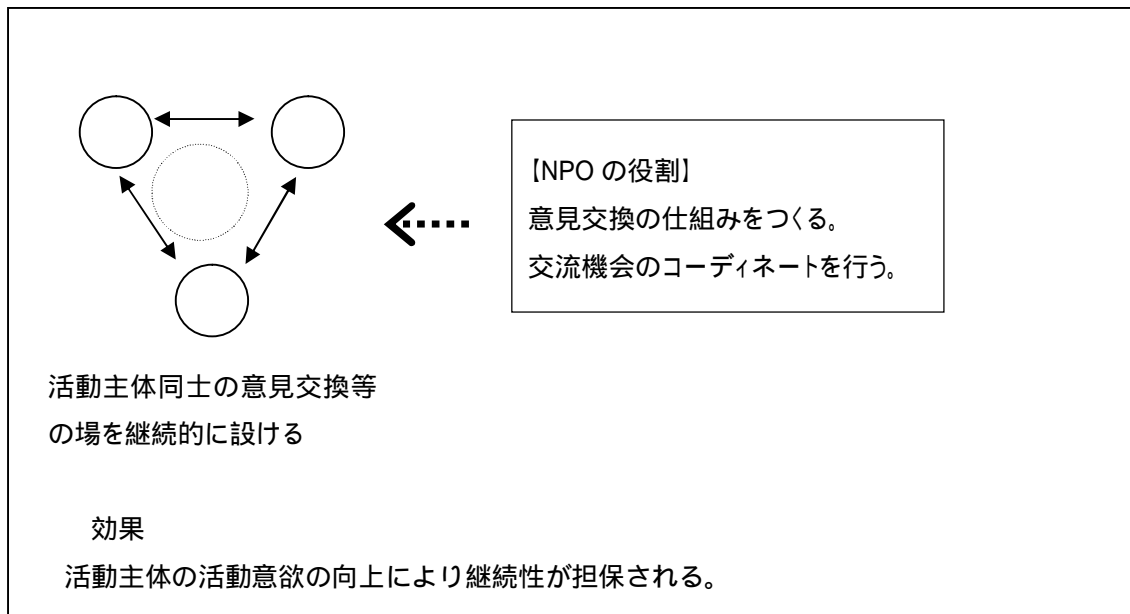
#### タイプ1（協働：発足段階）

NPOが共有される目標を提示し、協働しながら実践に結びつけるタイプである。



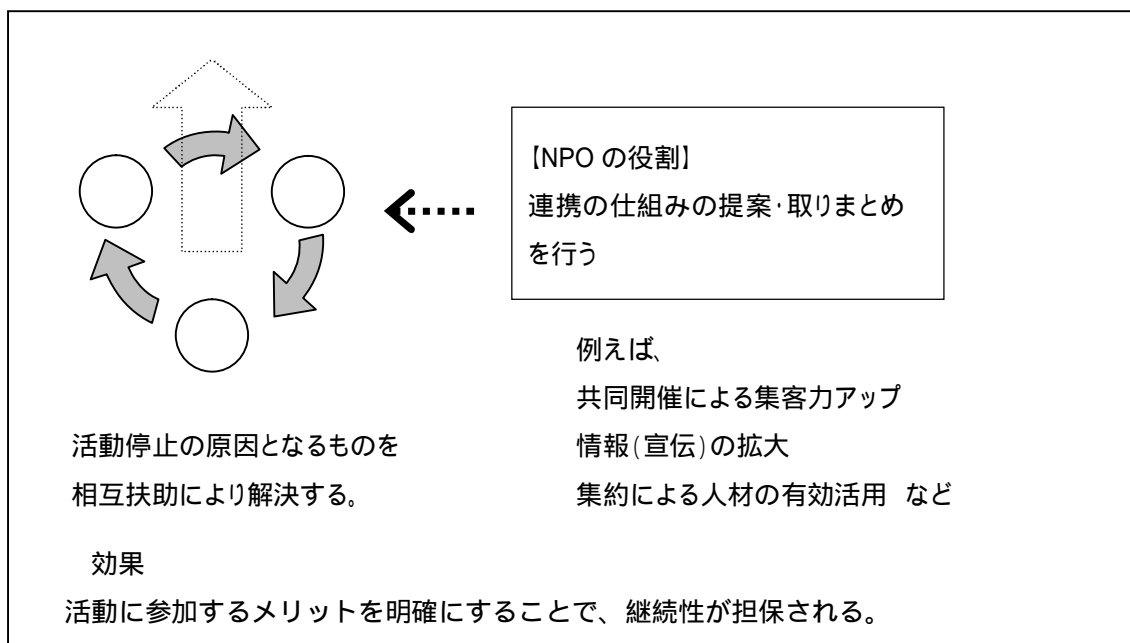
### タイプ2(交流)

NPOが意見交換や交流の機会をつくり、活動主体の活動意欲を向上させるタイプである。



### タイプ3(連携)

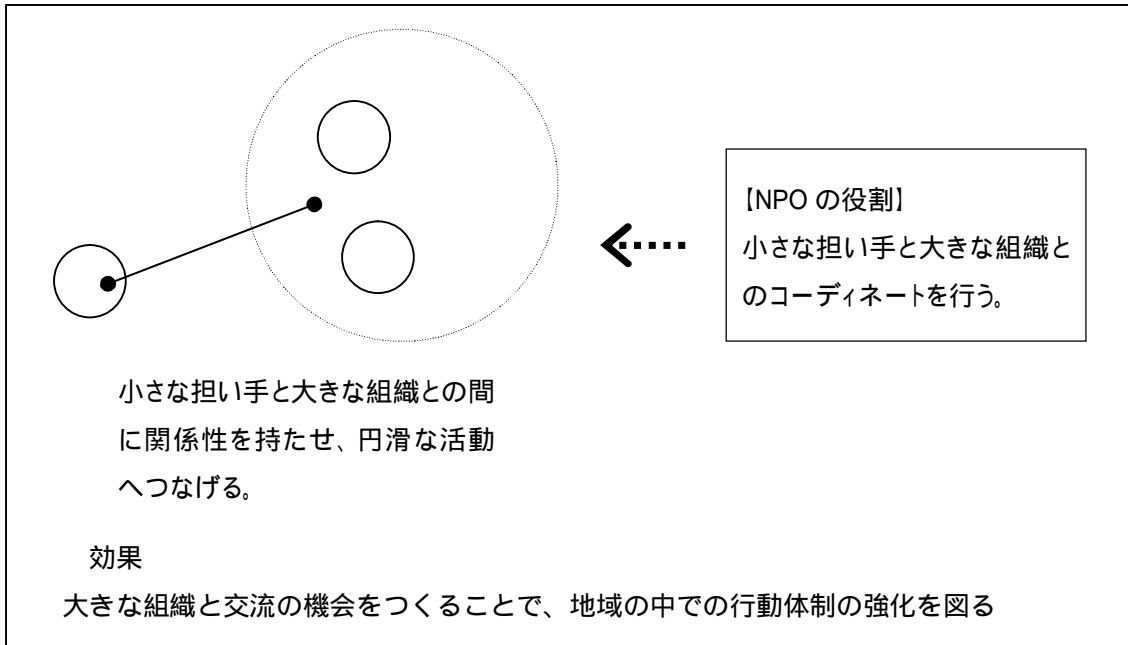
NPOが連携の仕組みや共通の課題を提案し、活動に参加するメリットを示していくタイプである。



小さな担い手と大きな組織との間のコーディネート

NPOが大きな組織と交流の機会をつくることで、地域の中での行動体制の強化を図るタイプである。

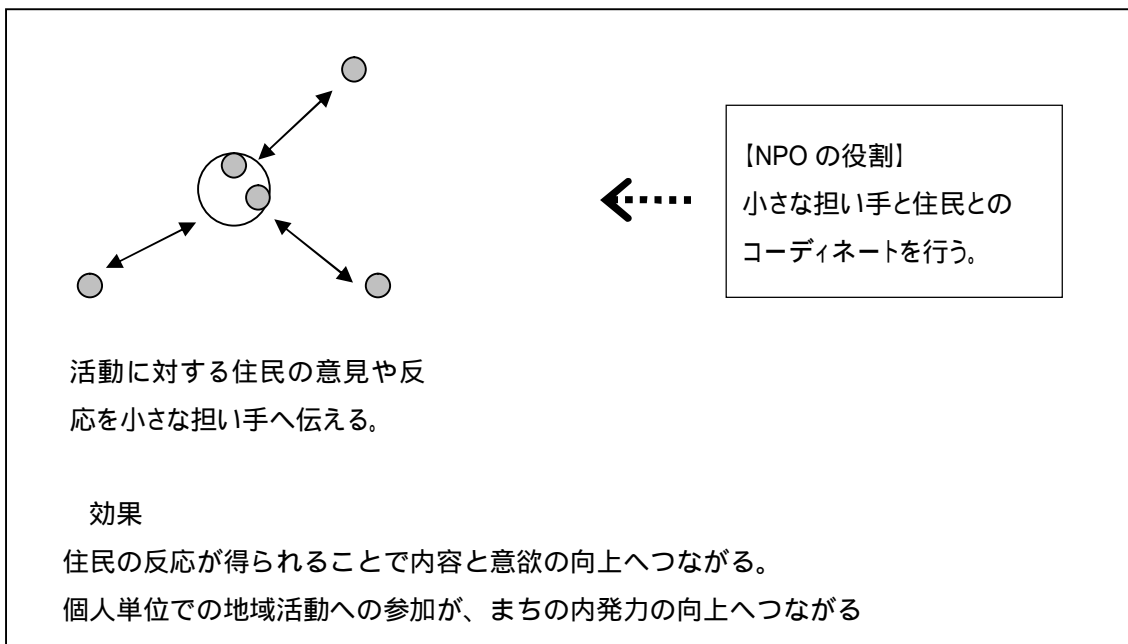
〔関係性の構築〕



小さな担い手と住民との間のコーディネート

NPOが住民を巻き込むことにより、地域の内発性をより向上させるタイプである。

〔交流〕





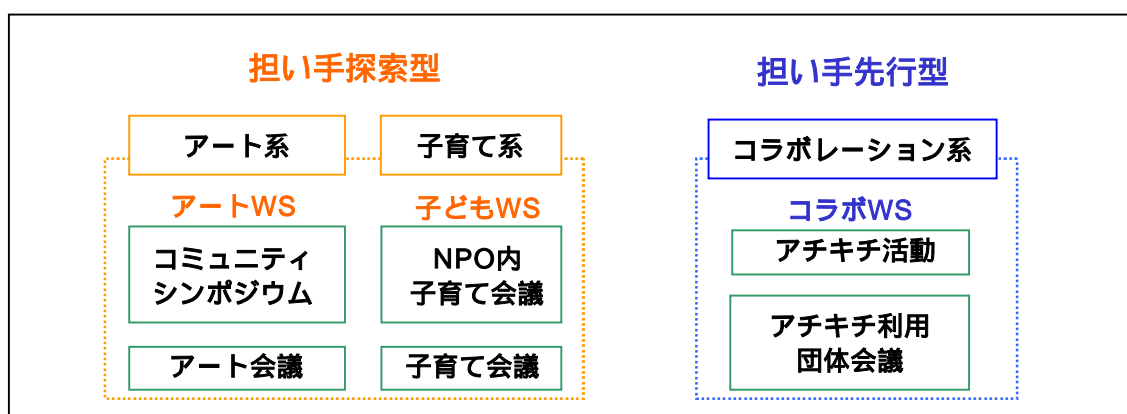
## 4 コーディネートの実施

### (1) コーディネートの考え方

ヒアリングを通して抽出した地域の課題・活動の方向性より、コーディネート案を作成した。

本調査では、コーディネートにあたり、ヒアリングを通して発見した担い手によるワークショップと、これまでのコミュニティ活動を通してネットワークを形成した担い手によるワークショップを実施した。前者を「担い手探索型」とし、本調査ではヒアリング結果より「アート系」・「子育て系」を実施、後者を「担い手先行型」とし、様々な分野の担い手を束ねた「コラボレーション系」のワークショップとして実施した。

下図が「担い手探索型」および「担い手先行型」のコーディネートの図式である。



「担い手探索型」と「担い手先行型」の図式

### (2) アート系コーディネート

アート系コーディネートの背景

アート系の担い手探索のためには以下の2つの背景がある。

アート関係の創作活動をしている個人や団体は、連携ニーズがある

アート関係の活動主体は、他のクリエイターとの交流や広報活動支援を求めるなど、連携ニーズがある。活動家が集まることによりスケールメリットが生まれ、場所利用や広報活動を有効に行うことができるようになる。

アート活動による地域文化の創造と、ブランディングに結びつける

拠点を設け、地域全体でアート活動を行うことで、まちのブランド化につながる可能性がある。

## アート系コーディネートの目的・目標

アート系の担い手探索型のコーディネートには以下の3つの目標がある。

- ・ 地域内におけるコミュニティアートの実施のための基盤づくり
- ・ 個人や団体の場づくりや、ファシリテート
- ・ 活動のプロモーションと、共感者、参加者の幅広い集合化

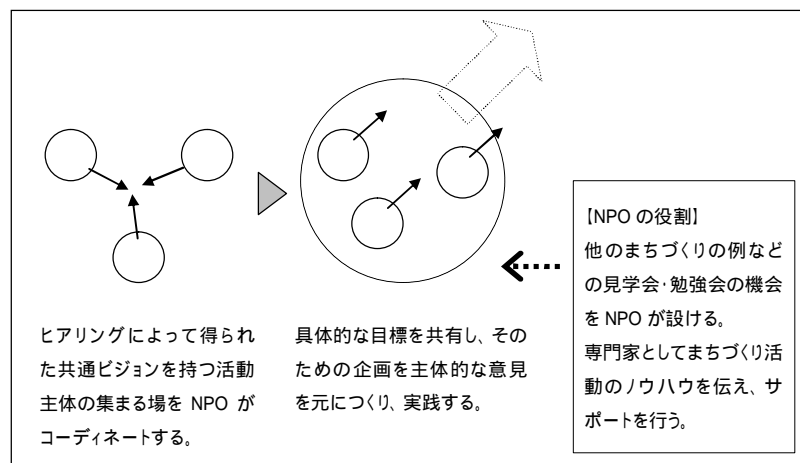
そのために、本調査で実施するアート系のコーディネートは以下の2つを目的とする。

- ・ 活動の中心となる担い手の発掘
- ・ 担い手同士の意思の疎通と具体的な取り組みへの展開

## アート系コーディネート方法

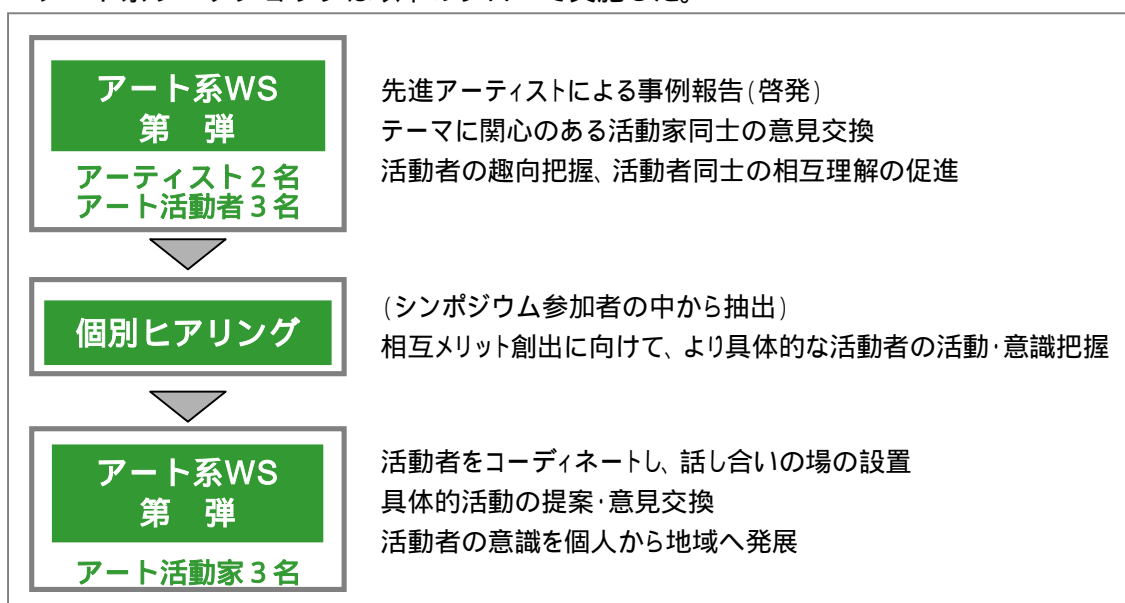
### 1) アート系の束ね方のタイプ

アート系の束ね方は、タイプ1〔協働：発足段階〕となる。



### 2) アート系ワークショップのフロー

アート系ワークショップは以下のフローで実施した。



## アート系ワークショップの実施

以下の2つのワークショップを実施した。

### 1)アート系WS 第 弾 「アートによって地域を開く」

日時：2008年11月24日  
場所：NPO ちば地域再生リサーチ事務所 「クラカラ」  
参加者：アーティスト2名、アート活動者3名



アート工芸によって地域の力を引き出し高め、地域活性と再生の可能性を探った。アーティストとして活動する住民、地域で活動する専門家、NPOなどが集い、目指すべきビジョンをともに考えた。コミュニティの中でアートを使った活性化を実践している2人のアーティストが話題提供をし、その後、地域の力を高めるためのアートの役割について、意見を交わした。

「イギリスの団地再生とアート」…マイケル・ニーダム (Neighbourhood Watching)

「千葉アートネットワーク・プロジェクトの事例」…神野真吾 (千葉大学准教授)

このWSでは次のような成果があった。

テーマに関心のある活動家同士の相互理解の促進

シンポジウムという形式で対象を公募することで、そのテーマに関心のある団体・個人を集めることができた。また、ディスカッション・懇親会の開催により活動家同士の意見交換を行うことができ、今後のアート活動の方向性を確認した。

先進アーティストによる事例報告(啓発)

先進アーティストから実践的な取り組みについて話を伺い、地域の担い手を触発し、話を引き出すことで、地域づくりへのモチベーションを高められた。

### 2)アート系WS 第 弾 「アートによって地域を開く」 活動家会議

日時：2009年1月16日  
場所：NPO ちば地域再生リサーチ事務所「クラカラ」  
参加者：アート活動者3名

レジデントアーティストとNPOスタッフがアート活動会議を開き、アート活動の今後の展開についてビジョンの共有と活動の計画を行い、具体的な活動へつなげる会とした。

地域活動に意識のあるアーティストの発掘・働きかけができた。話し合いを通して、アーティストの意識が自身の活動から地域全体の活動へと広がりを見せた。

次の活動提案として、担い手よりさらなる地域の担い手集めを目的とした「アートフェア」の提案があり、アーティストが出展・審査員などの形で連携しながら開催する具体的活動に向けた意識を統一することができた。

## アート系コーディネートのまとめ

### 1)到達点

地域のアーティストを発掘するためのアートイベントを開くことを決定した。また、さらなる地域でのネットワークを広げ、今後の活動へ発展させることが確認された。

### 2)コーディネートのポイント

アート系コーディネートのポイントとして、以下の3つが考えられる。

#### 外部からの担い手による話題提供

シンポジウムにより外部の事例を聞くことで、地域のまちづくりイメージが抱きやすくなり、担い手同士も将来のまちづくりのイメージを語り合うことができた。

#### 担い手同士の相互理解と信頼関係の構築

意見交換の機会を設けることで、各々の価値観の確認ができた。また、活動会議では具体的なイベントの話題を通して、各々が抱いている地域づくりのビジョンを確認することができた。

#### 多様な担い手のコラボレーション

ベテランのプロアーティストと若手のセミプロアーティストが参加することで、多様な担い手の活動しうるプロジェクトに発展していく可能性が見えた。

### 3)今後の課題

アート系コーディネートの今後の活動の課題として、以下が考えられる。

#### まちづくりテーマの設定

今後はさらなる担い手の発掘が必要となる。シンポジウムの開催を数回重ねる必要があるが、担い手を集めるにあたってシンポジウムのテーマ設定・宣伝方法が重要になる。あらかじめNPO側で地域活動に向けたより具体的なテーマ提案が必要である。

### 4)今後の展開

今回発掘した2名の担い手と共に、より具体的なアートのまちづくり活動を展開していく。まずはアートフェアの開催に向け、2名の担い手と連携しながらさらなる担い手の発掘を行う。また、シンポジウムを定期的開催し、今回と同様の手法で地域の担い手を探していく。

担い手側より提案のあったフェアの開催にあたり、出展者の募り方が重要になる。人伝てによるところが非常に大きい。また、出展者と担い手としてネットワークを形成するためにはコーディネーターの存在が不可欠である。

### (3)子育て系コーディネート

子育て系コーディネートの背景：

子育て系の担い手探索のためには以下の2つの背景がある。

子どもの環境づくりへの課題を感じながら活動する団体が多い  
ヒアリング調査を通して、子どもの環境づくりへの課題を感じながら活動する団体が多いことが把握できている。

多世代交流(子ども同士、親同士)による地域ぐるみの子育てビジョンの存在  
多世代で顔と名前のわかる関係での集団の居場所づくりなどのビジョンを担い手の多くが持っている。

子育て系コーディネートの目的・目標

子育て系の担い手探索型のコーディネートには以下の3つの目標がある。

- ・地域内における地域ぐるみの子育ての実施のための基盤づくり
- ・個人や団体の場づくりや、ファシリテート
- ・活動をプロモーションと、共感者、参加者の幅広い集合化

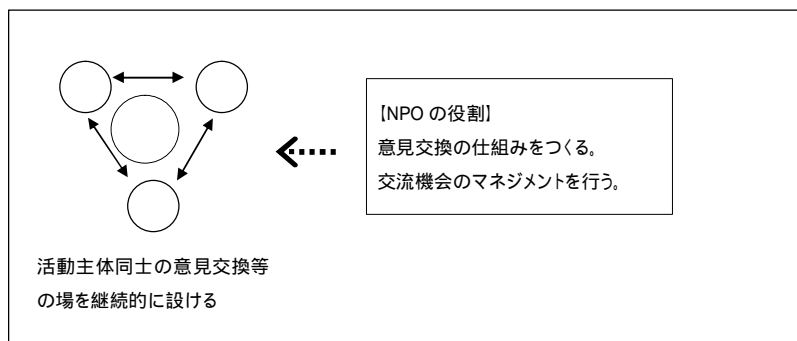
そのために、本調査で実施する子育て系のコーディネートは以下の3つを目的とする。

- ・活動の中心となる担い手の発掘
- ・「地域でつくる子どもの居場所」を継続的に考えていくきっかけづくり
- ・ワークショップによる、意思の疎通と具体的な取り組みへの展開

子育て系コーディネート方法

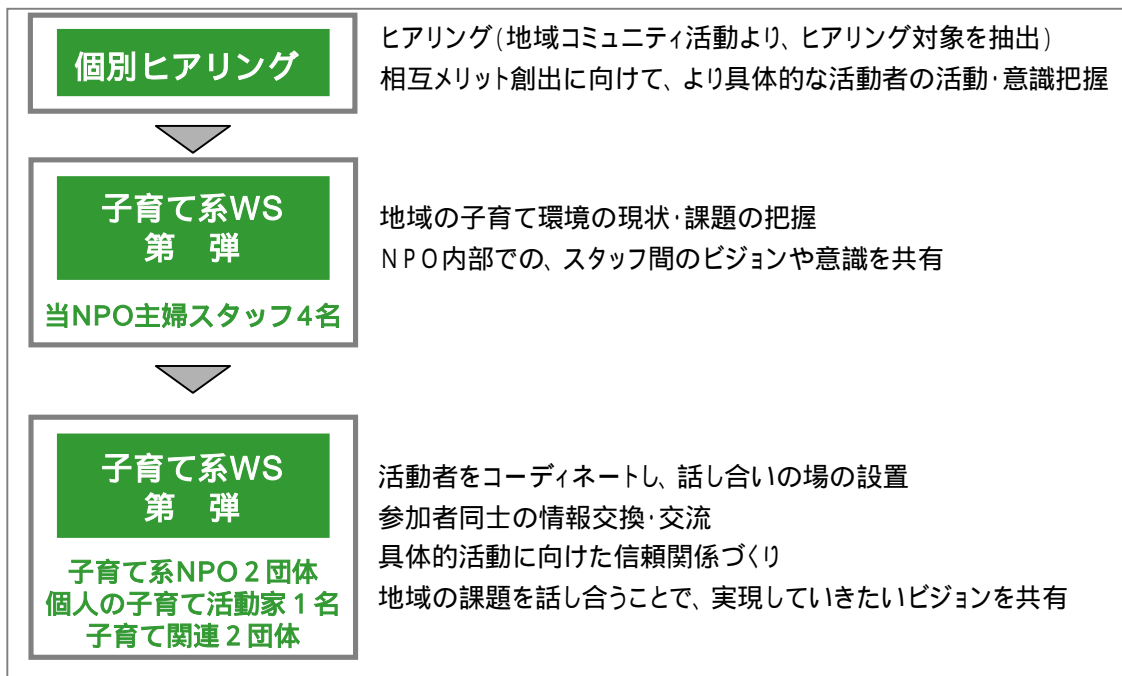
#### 1)子育て系の束ね方のタイプ

子育て系の束ね方は、タイプ2〔交流〕となる。



## 2) 子育てワークショップのフロー

子育て系ワークショップは以下のフローで実施した。



### 子育て系ワークショップの実施

以下の2つのワークショップを実施した。

#### 1) 子育て系WS 第 弾 「地域で子どもを育てる」NPO 内部会議

日時：2009年1月16日  
場所：NPO ちば地域再生リサーチ事務所「クラカラ」  
参加者：当NPO 主婦スタッフ4名

NPOスタッフ(主婦)による子育て活動会議を実施し、地域の子育て環境の課題について把握する。また、NPOの活動として今後取り組んでいく子育て支援活動について話し合い、ビジョンの共有を行った。

各々が抱える子育ての課題と地域の現状の把握をし、現代の親子に必要な居場所や他者との関係性について意識の一致ができた。地域に必要な子育て活動について、今後NPOの活動として取り組む検討ができた。



## 2)子育て系WS 第 弾 「地域で子どもを育てる」お話し会

日時：2009年2月9日

場所：NPO ちば地域再生リサーチ事務所「クラカラ」

参加者：子育て系 NPO 2 団体、個人の子育て活動家 1 名、子育て関連 2 団体

地域の課題解決に向け、課題の共有と活動の情報共有の機会をつくる。テーマとして、NPOでのイベント開催を取り上げ、次回以降につながる場づくりとした。

このWSでは次のような成果があった。

活動の情報交換、活動における課題の伝達、地域課題の共有

いずれの活動者も地域の子育て環境に課題を感じ、具体的な活動を実践している。意見交換を通して、活動の姿勢の相互理解ができた。

今後の活動ビジョンの提案

活動の方法として、地域の他の担い手との協力体制(情報・ニーズの提供・広報活動など)を形成するためのネットワーク拡大の提案があった。また、具体的拠点の提案として、商店街の空き店舗を活用した居場所づくりの話題が出た。

今後の意見交換会の定期的な継続の確認

次回以降も開催し、より具体的な話に展開していくことで一致した。連携することで、運営の担い手が増える、場所の維持もしやすくなるなど各々の活動の発展が期待できるという共通認識が得られた。

子育て系 WS のまとめ

### 1)到達点

ワークショップを通して、活動主体より以下の2点の提案があった。

他の団体とのネットワークづくり

地域の活動者のネットワークを広げ、発展させる。

共通のイベント開催・活動拠点の運営

場所を共有することは相互メリットの創出につながる。各々の活動の発展・担い手の増加につながる。

### 2)コーディネートのポイント

子育て系コーディネートのポイントとして、以下の3つが考えられる。

担い手同士の相互理解と信頼関係の構築

今後も共に活動する可能性があるため、ある程度時間をかけた相互理解のための意見交換・交流が必要。

多様な担い手による活動テーマ、活動エリアの共有

「子育て」というフィールドを共有する団体のため、活動の情報交換自体に意味がある。地域の「子育て」の環境に注力しているため、少しずつ立場が異なる人々であっても、地

域全体の課題の共有ができる。その結果として、共通の活動へつなげられる可能性が見えた。

### 3) 今後の課題

子育て系の活動の今後の課題として、以下の3つが考えられる。

継続的な会合の開催と相互にメリットのある活動の仕組みづくり

今回のワークショップは子育て活動家にとって大変忙しい時期と重なってしまい、参加者が候補者の一部に留まった。継続的に行うことで、その都度集まれる参加者間の交流を図る必要がある。またその際に、各々の活動の負担にならず、注力した分だけメリットがあるような仕組みが必要となる。

他の類似活動との差別化

他にも存在する地域の担い手の集まる子育て活動に対し、差別化を図ることで担い手のネットワークを広げていく必要がある。

### 4) 今後の展開

今後の展開としては、以下の4点が考えられる。

さらなるネットワークの拡大

今回は日程が合わずに参加できなかった担い手、また今回のワークショップを通じて紹介のあった担い手に対して呼びかけ、さらなる担い手の発掘を行う。

NPOでの取り組み

NPOで働く主婦層がイベントとして口コミをしながら、担い手の一員として初動期のコミュニティ活動を先導していく。

商店街活性化とのコラボレーション

今回議題に上がった「商店街」という場所をキーワードとして、商店街活性化活動と協働し、イベント的に子どもの居場所に関する具体的な取り組みにつなげていく。

アート活動とのコラボレーション

子どもの環境は地域全体を巻き込んでいける可能性のあるテーマである。また、コラボレーションを行えることが他のネットワークとの差別化にもつながる。今回別に行ったアート活動などと連携したイベントなどに発展していく可能性を検討する。



#### (4) コラボ系コーディネート

コラボ系のコーディネートを実施し、その結果を整理した。

##### コラボ系コーディネートの背景

現在、当NPOの運営するコミュニティルームを利用する活動団体は、活動テーマは様々であるが、下記のいずれかを目的として活動している。同じ活動の中に、複数のテーマとメリットが混在している。

地域貢献意識：	地域の活性化、商店街の必要性を感じて活動している
活動の周知：	主として福祉系の団体が自らの活動の周知を目的として活動
地域の人との交流：	地域の中の個人とのつながりを求めて、個人的に活動を主催

##### コラボ系コーディネートの目的・目標

コラボ系の担い手探索型のコーディネートには以下の2つの目標がある。

- ・商店街活性化活動とそのマネジメント
- ・それぞれの活動テーマを超えたコミュニティ活動の形成

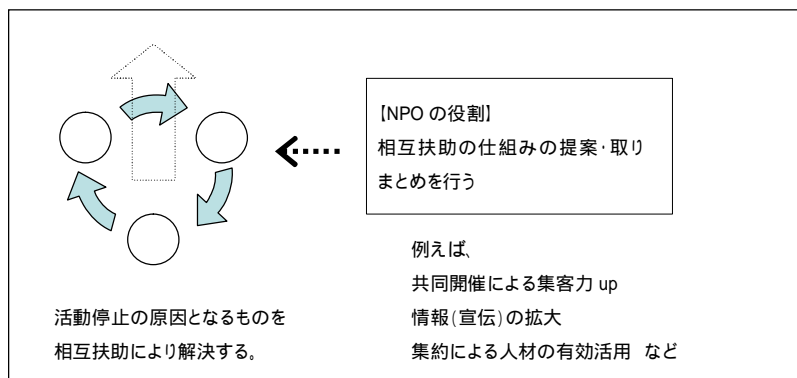
そのために、本調査で実施するコラボ系のコーディネートは以下の2つを目的とする。

- ・アチキチ運営における利用団体同士の継続的な交流・連携
- ・話し合いの場のきっかけづくり

##### コラボ系コーディネート方法

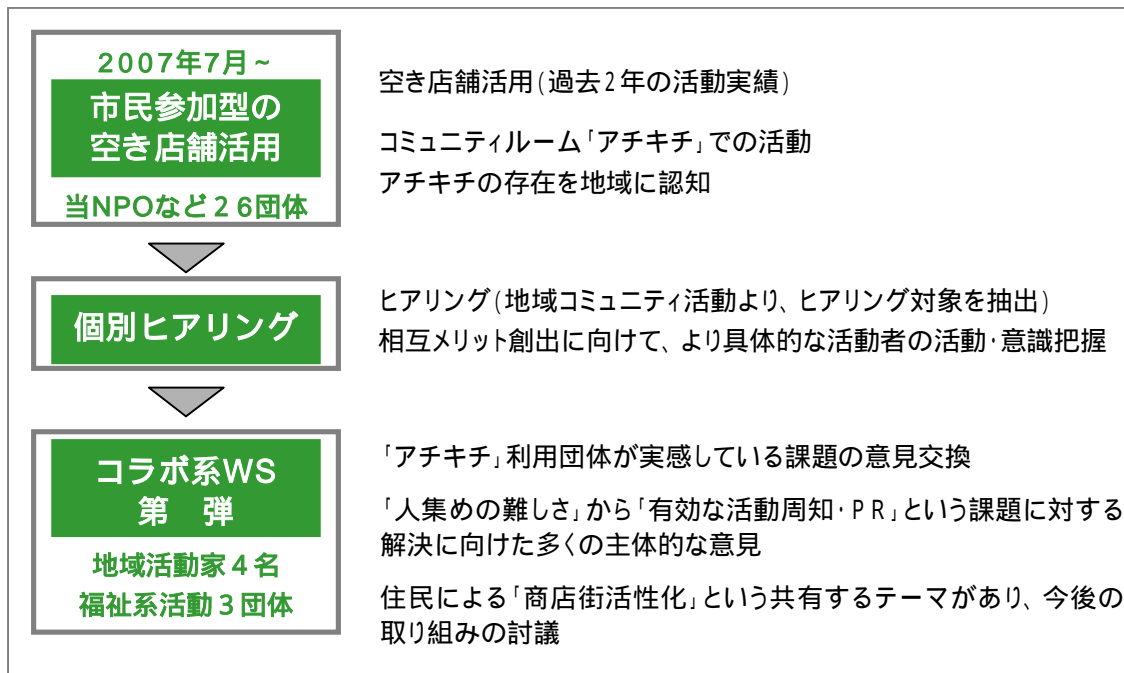
###### 1) コラボ系の束ね方のタイプ

コラボ系の束ね方は、タイプ3〔連携〕となる。



## 2) コラボ系ワークショップのフロー

コラボ系ワークショップは以下のフローで実施した。



### コラボ系ワークショップの実施

以下のワークショップを実施した。

#### コラボ系WS 「地域の中のアチキチづくり」お話し会

日時：2009年2月11日  
場所：稲浜SC内コミュニティルーム「アチキチ」  
参加者：地域活動家4名福祉系活動3団体



話のきっかけとして、アチキチの利用・運営方法について意見を交わし、次回以降に継続的につなげる場づくりとした。このWSでは次のような成果があった。

活動の情報交換、具体的共通課題の発見

アチキチでの活動の様子、問題点についての意見交換を通して、地域活性化活動および個人の活動において課題の共有ができた。

意見交換による主体性や地域貢献意識の向上

相互にメリットを創出する活動の工夫をしている団体の意見に、他の団体も影響を受け、活動における主体性や地域貢献意識の向上が見られた。

今後の活動に向けた具体的な活動・協力体制の提案

具体的に運営されている「場」があることで、実現可能性が高い具体的な提案が行われた。また、地域の他の活動団体との連携についてなど、地域の担い手より情報・ニーズの提供、協力体制の提案があった。今後も会を開催する方向で一致した。

## コラボ系 WS のまとめ

### 1) 到達点

ワークショップを通して、以下の2点について提案があった。

PR方法の改善

商店街外部からイベントが認識できるようなサインの設置（旗など）や、活動団体同士の連携によるPR

イベントの共同開催

不特定多数向けのイベント共同開催

### 2) コーディネートのポイント

コラボ系コーディネートのポイントとして、以下の4つが考えられる。

活動における具体的課題の共有

ある程度の活動実績がある上でワークショップを行うことで、活動における具体的な課題の共有が可能になる。

活動の核となるビジョンの共有

住民による「商店街活性化」というテーマを共有することで、様々な担い手が、活動の場を共有することで連携し、各々が自主的に、一体感を持って地域活性活動に取り組める。

担い手の活動できる拠点の存在による結束

場所があり活動できる「場所の運営」が相互メリットを生み、活動を束ねる源となる。

結果として生まれる交流

同じ課題を共有し話し合う中で自然に情報交換をしたい人物を見つけ、交流や活動の発展につながる。

### 3) 今後の課題

活動のテーマや課題が異なるため、コラボレーションは容易ではない。また、活動者間に温度差がある。ここでは、相互にメリットのある関わり方を個別に示しながら、個々の参加者のモチベーションづくりが重要となる。実際に個別の活動をしている活動者がやりにくくなったり、声の大きい人だけのためのものになったり、新しい担い手が入りにくくなったりしないようなコーディネートが求められる。

### 4) 今後の展開

今後の展開としては、以下の2つが考えられる。

活性化実行委員会との連携

稲浜SC活性化実行委員と連携し、活動団体の提案を実行委員の活動に反映していく。

具体的な活動主体同士の連携の仕組みづくり

今回は意見交換で留まったが、今後は住民側の集まる会として継続的に会議を行い、提案に出たような担い手同士の具体的連携関係を構築していく。

## 5 まとめと今後の課題・展開

### (1) コーディネートのまとめ

コーディネートの実施結果から、サステナブルコミュニティを形成するためのコーディネートの効果や課題についてまとめる。

コーディネートのためのワークショップの効果

#### 1) ワークショップの有効性

ワークショップの有効性について、下記の確認ができた。

ワークショップは担い手のコーディネートのためには有効な手段である

ワークショップを行うことで担い手同士の相互理解や情報交換ができ、今後の活動につながるができる。また、多様性のある担い手のコーディネートにより個々では起こらない活動の発展が見られる。

ワークショップの手法はテーマによって変える必要がある。

アート系（地域創造型）と、子育て系（問題解決型）は異なる。地域創造型は担い手の想像力を触発し、地域活動への主体性が生まれるような工夫が必要である。問題解決型は、問題を明確化し、より効果的な解決に向けて各々の役割を想定したコーディネートが必要である。

#### 2) タイプごとのワークショップの効果

担い手探索におけるワークショップの効果

担い手探索型のWSを通して、WS形式を取ることによる以下の効果が見えた。

同じフィールドで活動する個人・団体相互の情報交換、交流がひとつの目的となる。

フィールドが同じ同士であれば、「地域をこうしていきたい」という大まかなビジョンが共有できる。

ビジョンが似ているため、地域のための活動が各々の活動の発展につながりやすい。相互メリットが創出しやすい。

ビジョンは同じだが立場の異なる人が集まることで、活動の発展が生まれる。

担い手先行におけるワークショップの効果

担い手先行型のWSを通して、WS形式を取ることによる以下の効果が見えた。

活動の実態と経験があることで、共有できる課題が生まれ、不満の解決に向けて連携を模索できる。

拠点を共有することが相互のメリットの創出につながる。

「商店街・活性化」というテーマの引力により、「地域貢献」「周知活動」「営利活動」などを目的とする主体的な活動家が集まる。

意見交換を行うことで活動主体の主体性・地域貢献意識が相互に向上していく。

ワークショップの結果として、集まった団体同士の交流につながる。

## タイプごとのコーディネートの特長

### 1) 担い手探索型コーディネートの特長

担い手探索型のコーディネートでは、以下の特長が考えられる。

活動フィールド・テーマが同じであると、ビジョンの共有が比較的容易

活動フィールドやテーマが同じ担い手をコーディネートすると、地域や活動の課題に共通点が見られ、比較的容易に活動の共有ビジョンを導くことができる。

縦方向(テーマの深掘り)の発展と、横方向(担い手の広がり)の発展

集まった担い手の意見とまちづくりの視点から、活動の方向性のある程度誘導しながらテーマを深掘りしていく必要がある。また、それに伴って担い手の広がりを生み出すことで、活動をさらに発展させていくことができる。

### 2) 担い手先行型コーディネートの特長

担い手先行型のコーディネートでは、以下の特長が考えられる。

具体的な活動実績の中で、参加者の実感している不満や問題を中心に話が展開

具体的に活動の経験を元に、実感のこもった不満や問題を共通点として、課題と解決のための方法へと話が展開していく。

異なる活動主体のコラボレーション

テーマを限定しない活動主体が集まる機会の創出により、様々な活動をしている活動主体のコラボレーションへつながっていく。

## コーディネートの今後の課題

### 1) 活動主体間の調整

類似活動と競合関係のバランスのあるコーディネート

類似の活動をしていても、競合してうまくいかない場合が想定される。それぞれのバランスを見ながら、活動の場のコーディネートが必要である。

活動者間の役割分担の調整

個々の活動者がコミュニティの中でどのような役割を担いながら活動するのか、役割分担や、活動者の相互交流を促進するコーディネートが必要である。

活動者間の温度差への対応

活動者間に温度差があるため、相互にメリットのある関わり方を個別に示しながら、声の大きい人だけのためのものにならない工夫が必要である。

### 2) 担い手探索型における課題

担い手探索型のための活動では、以下の点が課題として考えられる。

具体的な活動方法・運営方法は回を重ねて詰めていくこと

テーマの違いに着目したコーディネート方法の工夫

### 3) 担い手先行型における今後の課題

担い手先行型の活動では、以下の点が課題として考えられる。

#### 担い手が活動できる場所と環境の確保

担い手先行型のコーディネートの場合、活動場所と運営・管理の役割を担えるコーディネーターがいることが前提となる。今回はNPOが運営するコミュニティスペースにおけるNPOのサポートがあったが、活動主体が自ら運営・管理と場所の維持を担えるようになるまでの期間は予測が困難である。

### (2) 運営上の課題

継続して新たな活動の担い手の発掘と連携支援のためのコーディネート資金の調達が必要である。サステナブル(持続可能)なコーディネート活動に向けて、以下の可能性を検討したい。

#### 企業のCSRとの協働

##### 具体的な再生まちづくりビジョン実現への参加

スポンサーを探す、まちづくり関連の助成金を得るなどの資金源が見つかる形までコミュニティを発展させる。

当団体が個々の活動から具体的なまちづくりビジョンを描き、コミュニティをリードする役割を担うことで、実現の可能性がある。

#### NPOの他事業との収支

##### コミュニティ活動と他事業との組み合わせによる相乗効果(付加価値)

コミュニティ活動の運営の範囲で収支を成り立たせることは難しい。しかし、コミュニティ活動の企画次第では集客・広報ツールとして有効に機能する可能性があり、当団体の他の収益事業の中でメリットとなりながら組み込むことができる可能性もある。また、他の事業とコミュニティ活動を組み合わせることで、他の事業における対外的な付加価値とできる可能性がある。

#### コミュニティ活動を地域で支えるしくみづくり

##### 住民とNPOが活動する新たな活動のプラットフォーム

ボランティア、コミュニティファンド等、住民とNPOによるコミュニティ活動資金を、地域で支える新たなプラットフォームづくりで補うという可能性がある。

### (3) 今後の展開

今後の展開として、以下の3つが考えられる。

#### さらなる担い手の探索とネットワーク

##### 1) ヒアリングの継続

さらなる担い手の探索に向けて、本調査で担い手発掘のための有効性が示されたヒアリングを継続して行う。

##### 2) より幅広いネットワークの形成

地域での情報収集、より大きな活動の実施に向けて、より幅広いネットワークを形成する。

#### 具体的な活動の実施

アート系については、街づくり活動に向けて具体的なイベントの開催の企画が進んでいる。担い手より提案のあったアート・フェスタ(5月)、アート・コラボ・ステーション(8月)を今後も具体的・継続的に実施する。

#### 具体的な活動の提案とワークショップ

##### 1) ワークショップの継続

本調査で有効性を示したワークショップにより、より具体的な活動を行うため、また多くの担い手の参加に向けて、ワークショップを継続させる。

##### 2) ワークショップにおける検討から具体的な活動の始動

本調査では意見交換・ビジョン共有に留まったが、エリアマネジメントに向けてはより具体的な活動の始動が必要であり、今後検討する。

##### 3) 新たなテーマによるワークショップの開催

今回は「アート系」「子育て系」に留まったが、地域には他のテーマで活動を行う団体も多く、エリアマネジメントのためにはより多くの担い手のコーディネートが必要である。地域課題の解決においては単体ニーズに一対一対応のサービス提供だけでなく、複数のニーズを同時に解決するようなハイブリッドの対応方法を検討する。「アート系」と「子育て系」、「子育て系」と「商店街活性化」などハイブリッドな取り組みへの発展に向けテーマを増やしていくことで、担い手の選択肢も増える。

